



滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2016 夏 vol.120

特集

近江商人博物館20周年 中路融人記念館開館

新撰 淡海木間撰 64 五百井神社 木造男神坐像

INFORMATION STATION 催し案内 2016 夏

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

中路融人の世界 ―湖国の風景に魅せられて―

展示期間 4月17日(日)～7月24日(日)

会場：中路融人記念館

特集

近江商人博物館20周年 中路融人記念館開館

↑ 中路融人記念館展示室。手前は《朝霧の川》(2004年)、中央は、屏風仕立て(六曲一隻)の大作《夕照の木立》(2004年)

↓ てんびんの里文化学習センターの全景。1階は文化ホール、2階が中路融人記念館、3階が近江商人博物館となっている



平成8年(1996)4月、近江商人を多数輩出した地域として知られる旧五箇荘町にオープンした近江商人博物館は、今年、開館20周年を迎えました。展示室のリニューアルに加え、4月17日、日本画家中路融人^{なかじゅうじん}さんの作品を展示公開する中路融人記念館がオープン。

記念館誕生までの経緯と中路作品の魅力、リニューアル記念展で公開中の洋画家野口謙蔵^{のくちけんぞう}についてお聞きました。

■東近江市近江商人博物館・中路融人記念館

住 所	東近江市五箇荘竜田町583
連絡先	TEL 0748 (48) 7101 FAX 0748 (48) 7105
休 館 日	月曜日(祝日の場合は開館)、祝日の翌日、年末年始
観 覧 料	大人300円、小中学生150円

アクセス JR 琵琶湖線「能登川駅」から近江鉄道バス「八日市駅」行きで「ぶらざ三方よし前」下車、徒歩約15分／近江鉄道「五箇荘駅」下車、徒歩25分(JR「能登川駅」からタクシー利用の場合は約10分)

取材／編集部 写真／平田尚加



近江商人の存在が、 地域全体の文化力を押し上げていたのは 確かだろうと思います。

近江商人博物館 学芸員 上平千恵さん
中路融人記念館

20年前の開館のときも展示された中路作品

近江商人に関する古文書などが展示されている博物館と同じ建物に、日本画家の展示館ができたことは、素人目には意外な感じがするのですが。

上平 近江商人博物館自体は、平成8年4月、当時は合併前で神崎郡五個荘町だった頃に、「近江商人発祥の地・てんびんの里」のPRを兼ね、彼らの業績を顕彰する施設としてオープンしました。

じつは、その開館のときも企画展示室のこけら落としとして、中路先生の作品の展示会をさせていただいたんです。

——開館以来のおつきあいなのですね。

上平 近江商人の社会的な貢献という場合、経済活動、商業活動が注目されますが、文化振興、芸術振興の面でも、非常に貢献が大きかったんです。

明治以降の美術界でいえば、近江商人の家に生まれて日本画家になった野村文孝^{※1}。幼少期に五個荘地域の商家の養子となって同郷の野村文孝から絵の手ほどきを受けた山

元^{ちとしげんきよ}春^{はる}挙^{きよ}。あるいは、五個荘の大商人である塚本定右衛門家に丁稚奉公^{ちやうぢほうこう}に入り、その才能を認めた主人の援助を受けて日本画家になった郵松雲外^{ゆうしょううんがい}。^{※2}

金堂地区の外村与左衛門^{ぐんどうのよざえもん}家は、いまでも存続している総合繊維商社、外与の創業家にあたりますが、その10代与左衛門も、幕末期に活躍した文人画家の日根対山^{ひねたいざん}に絵を習っています。お宅を見せていただいたさい、絵具がいっぱい残されていました。

湖東へやってきた文人画家が近江商人の本宅に逗留^{とうりゅう}することもよくありましたし、近江商人の存在が、地域全体の文化力を押し上げていたのは確かだろうと思います。

本来、近江商人と日本画家の結びつきは深かったわけですね。

上平 20年前の開館当初に、中路先生の作品を展示したのも、かつての近江商人のふるまいにならって、博物館が地域の人々に日本画に触れていただける機会を創出することが、一つの目的でした。

プロフィール

うえひら・ちえ／1972年、大阪府生まれ。1997年より近江商人博物館勤務。専門は日本近世史。

「20年という区切りで中路融人記念館ができたことは、一つ大人になったみたいな感じがですね」

そして、以降も毎年春の企画展は日本画展と決め、中路先生のご協力のもと、ご紹介していただいた現代日本画壇で活躍されている作家を毎年お一人ずつ紹介してきました。そちらもちょうど20年になります。

記念館の開館までの経

※1 野村文孝（1854～1911）日本画家。京都生まれ。父は五個荘出身の呉服商・野村宇兵衛。円山・四条派の写生画に近代の描法を加味した風景画を得意とした。

※2 山元春挙（1871～1933）日本画家。膳所（大津市）に生まれるが、幼少期に五個荘の小杉家の養子となる。野村文孝、森寛齋に師事。伝統的写生画に西洋画風を取り入れた独自の画風を確立。

※3 郵松雲外（1870～1938）日本画家。近江生まれ。奉公先の塚本家で絵の才能を認められ、森寛齋に師事。国内各地を旅行し、風景画を多く描いた。

※4 日根対山（1813～1869）文人画家。和泉（大阪府）生まれ。幕末に京都で活躍した。

緯をお教えいただけますか。

上平 まず、開館のきっかけは、中路先生から東近江市に、描かれてきた作品52点を寄贈いただけることになったことです。

近江商人博物館の開館のさいにも、博物館に《朝露》（6ページ参照）という作品1点を寄贈いただいたのですが、その後は素描を数点集めさせていただいただけで、本画は所蔵していませんでした。

中路先生は京都出身ですが、お母さんが東近江市五個荘木流町^{きながせ}の生まれで、里帰りのさいにはよく連れてきてもらったそうなんです。あちこちで遊んだ記憶もある、



近江商人博物館で恒例となった春季企画展「日本画展」（写真は平成23年のようす）

ゆかりのある土地だと。

その時、目にした曲がりくねった小川や、田んぼ、榛の木などがすごく印象深く、自分が作家になって題材に悩んだとき、母に連れていってもらった五個荘の風景を思い出したそうです。以降、描きたい風景を追い求めて、60年以上もの長い間、滋賀県の風景を描き続けてこられたんですね。

自分にとっても、創作の原動力となるような場所であった東近江市に寄贈しますという、ありがたいお話で。

ところが、それだけの作品を公開する施設が東近江市内には存在しなかったんです。そこで、近江商人博物館も入っている、てんびんの里文化学習センターの2階を改修して、先生の作品をいつでも見ていただ

る展示室をつくることになりました。

その記念館のオープンが、開館20周年の年になったのは偶然なのですが、本当に記念すべき20周年になったと思います。

近江商人博物館は、金堂の町並みの散策とワンセットで訪れる方が多いと思いますが、ちょうど中路先生の作品は、かつての五個荘の風景を幻視するような……。

上平 そう感じていただけると一番うれしいですね。私も展示しながら、近江商人が見た風景もこんなふうではないかと思いました。江戸時代、こういうところで近江商人たちが生まれ育ったんだと、ビジュアルでも感じていただけるのではないでしょう。か。そう思っ

近江商人博物館の新コーナー

上平さんご自身は、日本美術は専門外の分野なのは。

上平 それまでは古文書などの資料を相手にしてきましたので、正直、知識がまったくなくて(笑)。初めは自分が日本画という非常にデリケートな作品を取り扱うことに対して不安がすごくありました。

日本画とは、日本の伝統的な岩絵具で描いた絵をさすというのも、展示会にたずさわるように初めて理解したほど、何も知らない中で、いろいろな方のご協力を得ながら、作家の先生に毎回教えてもらいながら、何とか形になってきたという感じですね。

美術の方向から近江商人に接近することで、理解が深まる面もあるのでは。

上平 確かにそうですね。日本画の展示をする中で、江戸時代の近江商人の業績を追うさいに芸術文化、文芸などもふくめて見るようになると、本当にこの地域の近江商

↓五個荘金堂町の町並。地区の主要部分は、寺院を中心に商家建築と農家建築が混在する景観が、湖東平野の伝統的な農村形態をとどめているとして、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている



人たちは豊かな文化活動をしていたと感じるようになりました。

最後にになりましたが、近江商人博物館の展示リニューアルを紹介いただけますか。

上平 近江商人博物館の展示替えとして、まず、以前は常設展示室内にあった「帳場体験」コーナーを、外光のあたる3階ロビーに移動しました。広々とした場所で、丁稚さんなどの衣装を着て写真撮影を楽しんでいただけます。

常設展示室内には、2つのコーナーを新設しました。「近江商人の家訓」では、商人の心得として「陰徳善事」を説いた中井源左衛門家「金持商人一枚起請文」などのいくつかの家訓を展示し、「現代に活躍する近江商人系企業」では、近江商人にルーツをもち、現在もその理念を継承している企業として14社を紹介しています。

続いて、リニューアル記念の「野口謙蔵」展についてお聞きします。(8ページへ続く)



↑「近江商人の家訓」

右手の「金持商人一枚起請文」(複製)は、さるゆかりの方からの寄贈
 ×「帳場体験コーナー」

大福帳などが置かれた商店の帳場を再現
 →「現代に活躍する近江商人系企業」 紹介している企業の一つ、矢尾百貨店(埼玉県秩父市)を訪れた上平さんは、滋賀県から来たと告げると思わぬ厚遇を受けたそう



ふだんはあまり意識しない 光、水、木などが、 すごく特別なものに 見えてくるんですね。

近江商人博物館 学芸員 福井 瞳さん
中路融人記念館

絵の中に広がっている一つの世界

——新卒で学芸員になられて、最初の館として、中路融人記念館に来られたところなんです。

福井 そうなんです。本当に一年目なんです。大学では、日本美術史の専攻ではありましたが、専門は漆の関係です。工芸品の意匠や文様などを研究していたので、絵画が専門というわけではないんです。

——日本画の系統としては、岸竹堂きしちくどうから連なる写生を重視する……といった中路作品の歴史的な位置づけの部分はとばして、その特徴をお聞きしましょうか。

福井 私の主観が中心になってしまいかと思うんですけど、特に光や水、あと木立ちなどを注目して見ていただきたいなと思います。

中路先生の作品を見ると、ふだんはあまり意識しない光、水、木などが、すごく特別なものに見えてくるんですね。確かにそこにあるんだと、改めて気づかされるような表現をなさっているなと思います。

例えば光源である太陽や月でも、ぼやくと、輪郭がさだかでないような描き方なのですが、もしそうでなかったら、まったく違った雰囲気になると思います。遠景の部分をずっと見つめていると、その絵の中に入り込めるぐらいの一つの世界がそこに広がっているなと感じるんですね。

——好きな作品をあげただけですが。

福井 色が一番好きなのは、『遙光』ようこう（7ページ参照）という作品ですね。このピンク色の絵を初めて見たとき、「うわぁー」と感動しました。水面に映っている光がとても幻想的に見えて。実際にある琵琶湖畔の風景をもとに描かれているのですが、この色を使われると別の世界みたいで、私は心の中で自分だけの作品として楽しんでいきます。

——来館者の方の反応はいかがですか。

福井 開館前日の4月16日に行われた特別無料観覧会の際にお聞きした感想としては、

制作当時の風景、榛はんの木などを実際に見ていた世代の方から、「こんな景色、確かにあったな。懐かしいな」といった感想が多かったですね。それから作品の現物を近くで見ると、岩絵具の細かい粒が光に反射してきらきらしているのがわかる

※5 岸竹堂（1826～1897）日本画家。彦根生まれ。明治初期に西洋画の技法を積極的に取り込み、『大津唐崎』などの作品を生む。竹堂に師事した西村五雲（1877～1938）、五雲に師事した山口華楊（1899～1984）、華楊に師事した中路融人と、いずれも徹底した写生にこだわる流派とされている。

あとはやはり、左手だけで描かれたというエピソードもふくめて『気』（7ページ参照）も強く印象に残る作品です。中路先生の絵にかける思いがよく伝わるエピソードですし、木の緑も美しく、画としても好きです。

——これも苗の列が並ぶ田んぼの水面に、ぼやあと太陽の光が反射しています。

福井 そうですね。私は光線の反射が好きなんだと思いますね。

——なるほど。それは一般的な日本画にはない中路作品の特徴でもありますね。

福井 はい。ただし、目に刺さるような強い光ではありません。中路先生は、日本の特色は湿度の高さだとおっしゃっていて、水と空気が醸し出す繊細な感じを求めているように思います。

胸にしっくりくる作品に関するお話

ので、それが「きれいだな」とおっしゃる方もおられました。

——福井さんご自身は、榛はんの木のある風景などは見たことがない世代ですね。

福井 私は見たことがないんです。懐かしいというよりも、こんなきれいな景色があったんだという印象ですね。

逆に当時としては、ありふれた普通の景色で、目を向ける人は少なかっただろうと思います。それがいまになって特別な風景として意識される、絵の中だけに閉じ込められていることも、作品の価値の一つに



プロフィール

ふくい・ひとみ／1993年、滋賀県生まれ。2016年4月より近江商人博物館・中路融人記念館勤務。

「8月6日から開催する『中路融人の世界Ⅱ』（10ページ参照）のテーマは、私の好きな「光」です」



↓《朝靄》 1977年ごろ
「旧伊香郡（長浜市）高月町 東阿閉のヤンマー
会館のあたり。当時は、このような風景が林立
していて、早春に、春の風景を追いかけて描いた」



日本画家 中路融人（1933～）



京都市生まれ。京都市立日吉ヶ丘高等学校美術科卒業後、農鳥社に入塾し、山口華楊に師事。1956年、《残照》が日展に初入選。1975年、第7回日展特選 日本芸術院会員 文化功労者 東近江市名誉市民

●各作品のコメントは、中路さんからの聞き取りを要約したもの

なっているんじゃないかと思えます。それから、展示室内に置かれたモニターでくり返し流している中路先生の制作風景の映像も、来館者の皆さんは熱心にご覧になっていますね。湖北の琵琶湖畔で実際にデッサンなさっているようすも見ていただけます。30分の映像なのですが、「2周観ました。感動しました」とおっしゃる方もいて。制作にあたっての考え、絵に対する思いも語っておられるこの映像を見てから、作品に接すると、より理解が深まると思います。

中路先生ご本人は、お会いになるとどんな方ですか。

福井 とても親しみやすい方です。4月29日に行ったギャラリートークにもご来館いただいたのですが、写生について、「ただ対象を写すというより、風景との距離感を縮めること。そうすると向こうも応えてくれる」とおっしゃったり、そのとおりだなと思う、胸にしくりくる説明をしています。

学生時代は、どこの工房でつくられたのかもわからない漆塗りの古い作品を研究対象としてきたのですが、作品から制作者の意図するものを読み取ろうとしても、あくまで推理でしかない。そこに苦労した覚え

↓琵琶湖畔で写生する中路さん（2016年2月撮影）



があるので、第一線で活躍中の作者からお話を直接聞けるというのは、とても楽しいですね。これからもどんどん、先生の作品に対する思いを聞いていきたいと思っています。



↑ 《^{ようこう}遙光》 2011年

「湖北でよくスケッチする場所。同じ時期でも、毎日見える景色は違う。一期一会の景色を描きたい」

↓ 《兆映

1995年
「湖北の^{おのえ}尾上温泉、湖北野鳥センターの辺り。太陽をほとんど描いてないが、そのようなぼうとした光の情景を描きたくなる。晩秋から早春までが私の好きな季節。夏はあんまり描かない」



↑ 《雪の朝》 2010年

「雪の伊吹山に、実際には、ここに生えていない木をドッキングさせた。この木は他の場所でスケッチしたもの。この木がほしかった」



↑ 《野の川》 1996年 四曲一隻

「早春のころ、長浜市室町の東の方で描いた」



→ 《^き氣》 1992年

「比叡山から途中越えて、京都から滋賀へ抜けていく道の琵琶湖大橋へ行く手前の田んぼと藪。早苗のころ、うっとうしい天気で、ぼうっと田んぼに映える情景に焦点をしばって描いた。制作時は、骨折して右腕が使えず、左手一本で描いたので、苦労したが、勉強になった」

リニユール記念特別展「ふるさと蒲生野を愛した洋画家 野口謙蔵」 作品の表現のされ方は全然違うけれど、 共通項があります。

近江商人博物館 学芸員 上平千恵さん
中路融人記念館

3階ではリニユール記念特別展として、洋画家野口謙蔵の作品展が開催中です。野口謙蔵の家も近江商人だったんですね。

上平 謙蔵の伯父にあたる、野口正章は蒲生郡綺田村（東近江市綺田町）生まれの近江商人です。野口家は江戸時代に山梨県に本店して酒造業を営み、正章は、明治初期に市販の国産ビールをつくったパイオニアとしても知られています。また、彼は、日本画家として活躍していた野口小蘗を妻としました。

謙蔵も商家に生まれて、商人になるはずでしたが、彦根中学校卒業後、家族の反対を押し切って東京美術学校に入學します。

そして、美術学校卒業後は郷里に戻り、生涯蒲生野の風景を描き続けました。洋画家をめざす若手はバリへ留学することが多かったのですが、謙蔵は、「どうしてみんなフランスに行きたがるのか。滋賀にもこんなに見飽きぬ美しい風景がいくらでもあるのに」と語ったそうです。

中路先生は日本画、野口謙蔵は洋画で、

↑謙蔵の心友であった米田雄郎をはじめ、多くの歌人との交流がうかがえる資料も展示

展示期間 4月17日(日)~7月24日(日)

会場：近江商人博物館特別展示室



↑《冬》1934年
謙蔵が好んだ蒲生野の風景を描く

←《雪朝可楽》
制作年不明。水墨淡彩の作品



作品の表現のされ方は全然違いますが、滋賀の風景に心惹かれたという点と絵に向き合う真摯さという点で共通項があるといえますね。

謙蔵は、昭和初期から帝展に入選して中央画壇でも認められるのですが、今回の展示会では、彼が画家を志していった学生時代の一番初期の作品から、絶筆《喜雨来》までを通してご覧いただけます。

水墨画なども何点か並んでいますね。

上平 美術学校卒業後、しばらく洋画をやるべきかどうか悩んだ時期があり、小蘗の娘で従姉の野口小蘗や平福百穂から日本画を本格的に学んでいます。「湖雲」という雅号もつけて。

きっちりした水墨画の作品から、だんだん謙蔵タッチになつていくのが……。

上平 そう、おもしろいです。掛け軸用に墨で描いても、謙蔵らしい、太く柔らかい線の、日本昔話の世界みたいな絵になつていくんですね。

風景画にも小さく人間が描かれていて、

洋画家
野口謙蔵 (1901~1944)



蒲生郡桜川村綺田（東近江市）生まれ。東京美術学校西洋画科に入学、黒田清輝、和田英作に師事。1931年、《獲物》が帝展で特選。1944年7月、死去。死因はカタル性黄疸と伝わる。

生活の気配もある。

上平 こっちにスズメが数羽いたり（笑）。結局、「日本画か、洋画か、そういうことは関係ない。絵の具が何であるかも関係ない。自分が表現したいものを表現すればいいんだ。絵筆は何でもかまわない」と悟ったそうです。

そうやって、洋画家として彼の独自性、洋画の中に日本的な诗情を感じさせると言われるスタイルを確立していくのですが、残念ながら昭和19年に43歳の若さで亡くなります。昭和13年から死の間際までの日記には、「夜中にばつと目が覚める。絵が私を呼んでいる」といったことが書いてあるぐらい、命を削るような思いで絵に対して真摯に向き合っていた作家です。

(2016.5.28)

※6

野口小蘗 (1847~1917) 日本画家。大阪生まれ。明治・大正期、奥原晴湖とともに、女流画人の双壁とされた。

※7

野口小蘗 (1878~1945) 日本画家。母の小蘗と同様、その作品はたびたび皇室御用品となり、名声を馳せた。

※8

平福百穂 (1877~1933) 日本画家。秋田県生まれ。京都で四条派の川端玉章に師事。歌人としても知られる。

五百井神社 木造男神坐像

栗東歴史民俗博物館学芸員 中川 敦之

冠をかぶり袍（上衣）を着ける貴族の姿をし、瞋怒相をあらわすこの神像は、栗東市下戸山の五百井神社の主神像です。10世紀後半から11世紀初めの作品と考えられています。

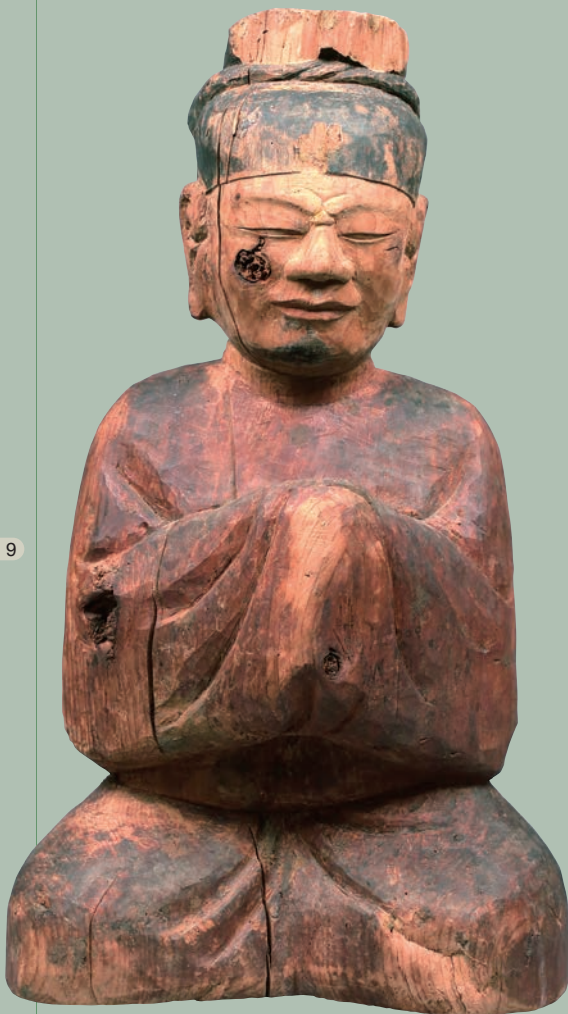
木俣神を祭神とする五百井神社は、延長5年（927）成立の延喜式神名帳に「蘆井神社」と記される式内社として知られています。平成25年9月、台風18号がもたらした豪雨によって発生した山崩れに本殿や拝殿が呑み込まれ、一帯が土砂と倒木に覆われるという壊滅的な被害を受けました。被災後、神社の関係者や地元の人たちが中心となって、土砂に埋もれた神像を探し出す作業が行われ、2週間ほどのちに発見されました。なお、同時に14世紀末から15世紀初めの木造獅子・狛犬も発見されています。

発見された神像と獅子・狛犬は、神社の関係者や地元の人たちの要望により、平成26年1月に栗東歴史民俗博

物館に寄託されました。その後、平成26年9月から12月にかけて、MIHO MUSEUM（甲賀市信楽町）で開催された「獅子と狛犬」展にそろって出品され、修復作業も行われています。

ところで、この神像の袍には緑青や朱の彩色が残されています。社伝によれば、五百井神社は仁寿元年（851）に正六位上、永治元年（1141）に従五位下の神位をそれぞれ授けられており、六位の朝服として定められた深緑色や五位の朝服として定められた浅緋色と、袍に残された彩色の一致がみられる点が注目されます。

この神像は、平成27年12月に滋賀県指定有形文化財の指定を受けました。五百井神社の地元・下戸山では、毎年5月5日の五百井神社の例大祭の継承や社殿の再建に向けた取り組みが続けられていて、この神像の滋賀県指定有形文化財としての指定は、地元での取り組みに弾みをつける話題と言えるでしょう。



※本像は、10月8日(土)から11月23日(水・祝)まで滋賀県立近代美術館で開催される「つながる美・引き継ぐ心 (仮称)」展に出品されます。

滋賀県立琵琶湖博物館 第1期リニューアルオープン！

7月14日(木) 午前9時30分～

今年で開館20周年を迎え、大幅リニューアルを行う琵琶湖博物館で、その第1弾として、「C展示室」と「水族展示」がリニューアルオープンします！

森から川へ、そして琵琶湖へとつながる環境・人間・生き物のかかわりを、体験型・参加型の展示、豊富な実物標本や生体展示で紹介します。琵琶湖固有種の生き生きとした姿や、普段は目にすることのない小さな生き物の不思議な生態は必見。



ロシアの淡水に生息する
バイカルアザラシ

国内ではここでしか見られない、世界の湖の珍しい生き物も登場します。

料金【常設展示観覧料】：大人750円、高大生400円、

中学生以下無料

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

須恵器登場

—その役割について—

7月16日(土)～9月25日(日)

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)

須恵器は、5世紀に入り朝鮮半島からの技術移入によって作られ始めた土器です。本展では、その役割や特徴など、須恵器のもつさまざまな側面を考えていきます。

初期須恵器(市三宅東遺跡) 野洲市教育委員会蔵

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円

休館日：月曜日(祝日は開館)、7月19日(火)、8月

12日(金)、9月6日(火)～8日(木)・20日(火)・23日(金)

お問い合わせ先：TEL 077 (587) 4410

中路融人の世界Ⅱ

—光おりなす情景—

8月6日(土)～10月10日(月)祝

中路融人記念館

東近江市所蔵作品から、“光”をテーマに作品を紹介。霞がかった柔らかい陽射し、水面に映る木々の陰影など季節・時・場所が変わる、光がおりなすさまざまな情景を展示します。

入館料：大人300円、小人150円

休館日：月曜日(祝日の場合は開館)、祝日の翌日

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 7101

どうやって、作ったの!? ふしぎもの大展覧会

7月14日(木)～8月30日(火)

世界風博物館東近江大風会館

小さな穴に大きな矢が通っていたり、ピンの中に手まりやトランプが入っているものなど、三次元的にあり得ないと思える不思議なもの「不可能物体パズル」を展示します。愛荘町の伝統工芸品である「愛知川びん細工てまり」も登場。不可能物体を見るだけでなく、来館者が手に取って遊ぶこともできます。

入館料：一般300円、小・中学生150円

休館日：水曜日、7月19日、8月12日、8月23日

■ふしぎもの工作教室

7月23日(土)・24日(日)、8月13日(土)・14日(日)には、紙やペットボトルで不思議な立体やカードを作る工作教室を開催します。

対象：小学1年生以上(4年生以下は保護者同伴)

参加費：500円(午前の部)、1000円(午後の部)

申込方法：7月11日(月) 午前8時30分から電話

受付開始 定員：各回先着50名

お問い合わせ先：TEL 0748 (23) 0081



KURITA BLUE

—名産青花と青花紙のある風景—

開催中～7月31日(日)

栗東歴史民俗博物館



青花紙づくりの道具類
栗東歴史民俗博物館蔵

平成28年度、現在も生産が続けられている草津市と、かつて生産していた栗東市、旧栗太郡を構成した2市が連携して、旧栗太郡の特産品として知られた「青花紙」をテーマに展覧会を開催します。

入館料：無料 休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

■現地見学会

7月17日(日) 午前9時45分～11時15分

会場：草津市上笠 講師：草津あおばな会

定員：20名(事前申込要、先着順)

■講演会「浮世絵の色」

—江戸っ子の愛した青花の色—

7月17日(日) 午後2時～4時

会場：栗東歴史民俗博物館 研修室

講師：田辺昌子氏(千葉市美術館 副館長)

(当日受付 事前申込不要)

■青花紙づくり体験会

7月30日(土) 午前10時～12時

会場：栗東歴史民俗博物館 旧中島家住宅

講師：草津あおばな会 定員：20名(先着順)

参加費：上記いずれも200円

お問い合わせ先：TEL 077 (554) 2733

KURITA BLUE

—名産青花紙の生産と流通—

7月30日(土)～9月4日(日)

草津宿街道交流館

栗東歴史民俗博物館の展示につづき、旧栗太郡で生産されてきた「青花紙」が、どのように作られ、使われてきたのかをわかりやすく紹介します。

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円

休館日：月曜日、祝日の翌日

お問い合わせ先：TEL 077 (567) 0030



続 ふるさと本庄

続 ふるさと本庄特別委員会 編
A5判並製本 総148頁 非売品

問合先 彦根市本庄町2595 (本庄町自治会)

平成6年発行の『ふるさと本庄』の続編。年齢別で開催した「お話を聞く会」での聞き取りをもとに、戦後から昭和30年代の暮らしと伝承行事を中心に記載。(2016. 6. 26 刊)

学校現場とひびき合う そして、高め合う

特別支援教育に係る巡回相談20年の歩み

北脇三知也 著

A5判並製本 総175頁 頒価1000円

問合先 大津市本堅田4-22-1-602 (著者)

小学校における特別支援教育の第一人者として活動してきた著者が、退職後に20年以上たずさわった特別支援教育に関する巡回相談の取り組みを振り返る。(2016. 7. 1 刊)



続 琵琶湖逍遙

琵琶湖一周の三角点をめぐって

道本裕忠 著

A5判並製本 総344頁 非売品

問合先 TEL 0749 (22) 0627 (サンライズ出版)

難病を患った著者がリハビリを兼ねて始めた徒歩の琵琶湖一周。平成10年発行の紀行文の続編。コース上の平地にある三角点80カ所を写真とスケッチ入りで紹介。(2016. 7. 1 刊)



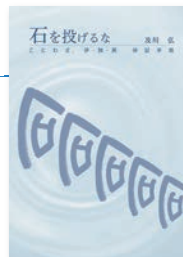
石を投げるな

ことわざ、伊独英併記手帳

及川 弘 著

B5判上製本 総318頁 2000円+税

本業の薬学研究のかたわら、辞書から書き抜いた伊・独・英のことわざを、場面・状況別に分けて整理。「一石二鳥」の新解釈と、84歳の現在もつづく語学学習の歩みを記す。(2016. 7 刊)



観音の里の祈りとくらし展Ⅱ —びわ湖・長浜のホトケたち—

7月5日(火)～8月7日(日)
東京藝術大学大学美術館

幾多の戦乱や災害に見舞われながら、1000年の時を経て今日まで大切に守り継がれてきたホトケたち。それらを有する「観音の里」長浜市との共催により、2014年に東京藝術大学大学美術館(上野)で開催された「観音の里の祈りとくらし展」の好評(約2万人来場)を受け、出品点数を大幅に拡大して開催される第2弾。

住民の暮らしの中に息づき、地域に根づいた「祈りの文化」を全国に発信します。



重要文化財 聖観音立像(洞寿院蔵観音堂安置)

会場 東京藝術大学大学美術館
本館展示室3・4

東京都台東区上野公園12-8

JR上野駅・鶯谷駅下車徒歩10分

休館日 月曜日(ただし、7月18日は開館)、7月19日

観覧料 一般 1200円 高校・大学生 700円(中学生以下は無料)



ギャラリートーク 1日2回 午前11時～午後4時～ 20分程度
第1回 7月9日(土)

「湖北の仏たち —平安時代の仏像を中心に—」

【講師】 秀平文忠氏 (長浜市役所歴史遺産課学芸員)

第2回 7月16日(土)

「湖北の観音信仰 —ホトケをまもるころ—」

【講師】 佐々木悦也氏 (高月観音の里歴史民俗資料館学芸員)

第3回 7月23日(土)

「湖北の仏像 その意味と造形」

【講師】 芹生春菜氏 (東京藝術大学講師)

第4回 7月30日(土)

「ホトケたちを守り続けた村々の姿」

【講師】 太田浩司氏 (長浜城歴史博物館館長)

お問い合わせ先 TEL ハローダイヤル 03 (5777) 8600

観音像
20軀余り、
如来像など
20軀余りを出品。
うち15軀は堂外
初公開!



古代の近江

— 史的探究 —

山尾幸久 著

A 5判並製本 総376頁 3000円＋税

文献史学の側から、通説にとられない独自の視点を提示してきた著者が、東アジア史も視野におき、古代近江に関わる重要事項を解説する。

びわ湖・長浜のホトケたちⅡ

長浜市長浜城歴史博物館 編

A 5判並製本 総160頁 1500円＋税

東京藝術大学大学美術館で、出品点数を大幅に拡大して開催される「観音の里の祈りとくらし展Ⅱ」（11ページ参照）の公式図録。オールカラーで、出品仏像とその所蔵集落・寺院の特徴を解説。



琵琶湖博物館ブックレット1

ゾウがいた、ワニもいた琵琶湖のほitori

高橋啓一 著

A 5判並製本 総112頁 1500円＋税

360万年前の大山田湖（伊賀市にあった古琵琶湖）や3万年前の琵琶湖では、水辺を巨大なゾウが歩いていた。気候変動とともに移り変わるゾウたちの姿を、化石をもとに紹介。

淡海文庫56 戦時下の滋賀師範

— 昭和18年の卒業生 —

滋賀県平和祈念館 編

B 6判並製本 総200頁程度 1200円＋税

滋賀県平和祈念館の企画展示で紹介された体験談を増補、解説も大幅に加筆し書籍化。いやおうなく戦争に巻き込まれていった滋賀師範学校（現滋賀大学教育学部）の学生たち。



表紙写真 《気》中路融人（部分、全体図は7ページ参照）

作者から東近江市に寄贈された作品の一つ。中路融人記念館の「中路融人の世界」展にて公開中（7月24日まで）。

編集後記 2ページ上の展示室写真で中央に見える《夕照の木立》という作品は、湖北水鳥公園（長浜市）辺りから西方を望み、近景の木立と沈む夕日、輝く琵琶湖が描かれていますが、実際の風景には存在するあるものを大胆にも省いているそうです。気になる方は、現物を前にお考えください。㊦



滋賀県で大切にすべき野生生物

滋賀県レッドデータブック2015年版

滋賀県生きもの総合調査委員会 編

A 4判並製本 総648頁 3500円＋税

5年ぶりの改訂により、絶滅危惧種などカテゴリー別に1440種を収録。2010年版から選定種は152種増加した。50ページ以上のカラークラピアに500種余りの写真を掲載。

再考 ふなずしの歴史

橋本道範 編著

四六判並製本 総340頁 2700円＋税

日本最古のすしと称されてきた滋賀県のふなずしの製造法の歴史的変遷と現状を、歴史学、文化人類学、生物学、栄養科学などの研究者が集い、さまざまな角度から究明した論考集。



段取り八分

近江学園木工科における職業準備支援

吉田 巧 著

四六判並製本 総198頁 1300円＋税

滋賀県立近江学園木工科で、木を使ったモノづくりを通して知的障害をもつ子どもたちと接した著者が、就労支援や職業訓練にたずさわる人々に向けて、指導上の手引きとして執筆。

滋賀県立近江学園創立70周年記念展示会（仮称）

7月12日（火）～18日（月）祝

昭和21年（1946）11月の創設から今年で創立70年となる滋賀県立近江学園。記念展示会として、窯業科の粘土を使った造形作品や美術クラブの作品（絵画など）を展示します。

会場：滋賀県立近代美術館 ギャラリー（大津市瀬田南大萱町1740-1）

主催：滋賀県立近江学園 共催：滋賀県立近代美術館 観覧料：無料

お問い合わせ先：TEL 0748 (77) 2811（滋賀県立近江学園）

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
（振替）01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先